

自分探しの旅

成田 茂

新潟から上京して勤めた約40年間のサラリーマン生活を2010年に終えた時、家内と共に車で西日本方面へ旅行した。越後・村上で育ち、大学を卒業後は東京の会社で仕事をしていたので、関東以西の地域になじみがなかったからだ。その旅行後に地縁血縁のない信州に夫婦で移住して15年になる。移住後しばらくしてから家内に退職記念旅行の印象を聞いてみると、「ただ走ってばかりで……あまり記憶に残っていない」という。家内にとっては、興味のある地域をゆっくり観光バスで周遊した方がよかったのである。

その旅は、当時住んでいた逗子から私が運転する車で、逗子―伊勢松阪―奈良―倉敷（岡山）―萩（山口）―唐津（佐賀）―高千穂（宮崎）―松山（愛媛）―京都―逗子と巡ったもので、8泊9日の日程で約2500キロメートルを走行した。今思い返すと、なんともあわただしい旅であり、あらためて西日本紀行をふりかえってみた。

逗子を出発し最初に到着した伊勢松阪では本居宣長旧宅を訪れ、宣長が約35年かけて「古事記伝」を書いた2階の書斎「鈴屋」を見学した。部屋には師の賀茂真淵を敬う「縣居大人の霊位」という自筆の掛軸が掛けられており、狭くて簡素な書斎が印象に残った。宣長は若い時には仏教を信仰していたが、「古事記伝」を書き終えた頃には、中国から渡来した仏教を含む漢心かんしんを排し、日本人本来の倭心やまとこころに関心を示した。60歳の時に有名な「敷しまの倭ごころを人とはば朝日にほふ山さくら花」と詠んだ。宣長の桜への深い思いとともに、日本人の心に対する鋭い洞察が感じられる。次いで松坂から奈良へ行き法隆寺、薬師寺、唐招提寺、平城京跡・朱雀門などを見学した。奈良・平安時代には仏教の影響がいかに強かったかを知った。鑑真は遣唐使の依頼を受けて日本への渡航を試みたが何度も失敗を繰り返し、初志貫徹して唐招提寺等で仏教の布教を行った。

奈良から大阪を通り訪れた倉敷は美しい水辺の都市であった。越後の出身である良寛が修行した円通寺があり、小高い所にある寺を尋ねてみると美しい庭園に良寛の像があった。良寛は円通寺の国仙和尚に10年以上にわたり師事し、「幾春冬を知らぬ」厳しい修行をして師より印可の偈を受けた。そして諸国行脚をしたのちに越後の国上山くがみやまの五合庵を住処とし、子供たちと手毬について遊び、仏教の世界をわかりやすい言葉で周囲の人に語りかけた。つまるところ良寛は仏教の心髄を説いた道元の哲学書「正法眼蔵」の世界を追い求

めた。道元は「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり」と詠っている。良寛は、「形見とて何か残さむ春は花山ほととぎす秋はもみぢ葉」と詠み、道元の歌を意識したことが読み取れる。そして弟子の貞心尼に「裏を見せ表を見せて散る紅葉」と、自己のありのままの姿を語り逝去したとされる。

倉敷から山陽自動車を走り山口の萩を訪れた。家内の意向もあつて訪れた萩ではもっぱら萩焼と萩ガラスを見て回った。そして関門海峡を超えて九州自動車道路をひたすら走り唐津の焼物巡りをした。呼子ロジに泊まり、玄界灘を見てイカ料理を味わった。そして唐津から九州を南下して熊本県側から阿蘇山麓をとおり宮崎県の高千穂峡を訪れた。それは古事記の世界を追体験する思いであつた。日本創生に係る神話にゆかりの高千穂峡や天安河原は天孫降臨を彷彿とさせる風景であつた。たまたま見学した夜神楽では、須佐之男命の悪行を恐れた天照大御神が天岩屋戸に隠れて葦原中国が暗闇になり災いも起つたので、天岩屋戸から大御神を連れ出そうと神々が策を講じ、最終的に天手力男により大御神を外に連れ出すことに成功し、この世が明るくなったシーンが演じられた。神の荒ぶる行為や世界の暗闇の出現などは、火山噴火を反映しているとも言われる。日本には桜島や阿蘇山などの活火山が多く納得される。古事記によれば伝説上の神武天皇はこの高千穂地方から大和を目指して東進し、飛鳥・奈良に至り王朝を開く基礎を築いた。神武天皇は兄と共に、船軍を率いて大分から、安芸国の多祁理宮に7年、吉備の高島宮に8年滞在するなどして、明石海峡を通り紀国の吉野川を溯り大和を征服したとされる。

私たちは高千穂から延岡市を經由して佐賀県よりフェリーで四国へ渡った。松山へ行く時に立寄った大洲では富士山の中腹にある盤珪禪師が開山した臨濟宗・如法寺に立ち寄った。仏殿は修理工事中であり人影もなく境内は苔むしていた。盤珪は仏教を庶民にわかりやすい日常語で話し、不生禪を広めたといわれる。盤珪は「我はただ虚空を家と住みなして、須弥を枕に独り寝の春」と詠み、自由人の面目を語っている。盤珪の歌は道元や良寛の歌の世界と密接につながっており、自然と自己を一体のものとしてとらえている。その世界観は、本居宣長が日本人のまごころを問われて「朝日にほふ山さくら花」と詠んだ世界に通じている。そして盤珪禪師が山紫水明の眺めに感嘆したその妙法寺は西日本豪雨の肱川氾濫で被災しなかった。そこには防災に対する智慧があつたと思われた。松山では子規記念博物館等を見学したが、子規や漱石なども通った道後温泉本館の湯に入らなかつたことが心残りであつた。

旅の終りは京都であつた。松山から淡路島を通り明石海峡大橋を渡って京都に入り、御所の近くで宿泊した。街の居酒屋からほろ酔い気分を外へ出ると、そぼ降る雨の中に威厳のある御所がたたずんでいた。今回の私たちの旅は車で数日走行しただけであるが、西日

本の広大な地域をイメージできた。そのコースは、神武天皇が東進したルートを逆走したことになる。神武天皇の東進は幾多の困難とまつろわぬ地域を征服する危険をとまなうものであり、長い年月を要したこともうなずける。

私は東京の会社で環境関連の仕事をしていた。退職後に移住した上田市に隣接する青木村では都会で感じられなかった四季折々の自然が新鮮であった。移住した年に母が亡くなり、翌年に東日本大震災、すぐ後に栄村地域に地震が起こった。2016年に熊本地震、24年には能登半島地震と続いた。私は1964年の新潟地震を新潟大学の校舎で遭遇したことを思い出す。激震により木造校舎の外へ逃げると道路に地割れが走り、空には黒煙が立ち上り、天照大御神が岩戸にお隠れになった時のように闇夜になった。それは石油コンベナートの火災であったが、私は火山噴火だと思った。その日は郊外の下宿に戻れず、友達の家泊めてもらって、翌日宿に帰り私の4畳半の部屋の戸を開けると、そこには火災から逃れてきた10数人の避難民が入っていた。不動産屋の管理人が避難民のために部屋を解放したからであった。私はその日物置で一夜を過ごした。ある人はパニックを起こし、大学の農学部校庭は避難民であふれ、食事、トイレなどの一切が不足していた。幸い現在は災害ボランティアが活動し避難所生活も向上している。

一方で福島原発事故の反省はまだ十分でない。いまだに2・8万人の避難民がいるうえ、避難指示のあった7市町村の住民帰還率が17%と少なく、原発近くの市町村ではさらに少ない。しかし政府は新設を含め原発回帰に舵を切った。原発回帰の前に、太陽光発電や風力、バイオマス等の再生可能エネルギー事業を強力に推進する必要がある。ただし景観問題や土砂流出等が生じないように環境配慮することが求められる。

日本は地震や洪水等の多い災害列島である。確かに自然災害は日本に限りない悲惨をもたらしてきたが日本民族の命を断ち切ることはできなかった。それが契機となって日本の歴史は生々発展してきたことも見逃せない。だが今後もそう言えるであろうか。

私たちの信州での生活は昨年より家内の病気により一変した。そのため今年の冬は介護のために越後村上の実家で過ごしている。55年ぶりのふるさと回帰であった。帰郷してから毎日のように暴風雨や大雪が日本海側を襲い、史上初の大雪に見舞われたところも多い。24年の夏の猛暑と今年の冬の大雪、大船渡市の山火事等には地球温暖化の影響が実感される。例えば大雪は温暖化に伴う偏西風の南下が寒気を呼び込み、日本海の水温上昇が多量の水蒸気を発生させて降雪をもたらしたとされる。今年のロスアンジェルス山火事も温暖化の影響が指摘されているなど、その兆候は世界中に表れている。すでに2021のIPCC（国連の政府間組織）の6次報告書では人為による地球温暖化は疑う余地なしと結論付けている。災害列島・日本は温暖化の影響に対応することが問われている。

る。それには温暖化対策の緩和策と適応策に科学技術を駆使することが必要であろう。しかし我々は大戦で科学技術は方向が間違えば原爆使用に至ることを経験した。その意味で科学技術を正しく使う知恵が必要であろう。それにはこれまで述べた道元、良寛、盤珪および宣長が示した世界観をもつことが大切だと思われる。それは自然と自己が一体となった世界観であり、人と自然、人と人が共生する世界である。私は「私」であると同時に、私は「あなた」でもある視点である。

西日本紀行は家内の慰労にとつては十分ではなかったが、私にとつては「人間とは何か」を問う、自分探しの旅であった。